

言葉との邂逅

『風景との対話』 東山魁夷 ○新潮社

もし、万一、

再び絵筆をとれる時が来たなら

風景との対話



我々の中に眠る才能は、
いかなるとき、開花するのか。

そのことを考えるとき、そこに
深い逆説があることに気がつく。

かつて、一冊の本と巡り会い、
その逆説を教えられた。

『風景との対話』

東山魁夷氏のその書の中に、
「風景開眼」という随想がある。

この随想の中で語られた、東山
氏の魂の独白が、いまも心に残
っている。

氏は、若き日に、画家としての
道を志しながら、なかなか世か
ら評価されることがなかった。
友人達が次々に画壇の寵児にな
る姿を見ながら、一人取り残さ
れた思いで道を歩んでいた。

しかし、その鬱々とした時代の
なかで、氏は、終戦間際の軍隊

に召集される。そして、爆弾を
抱えて戦車に肉薄攻撃する訓練
を受ける日々。その死を覚悟し
た日々の中で、あるとき、熊本

城から肥後平野と阿蘇の雄大な
風景を見る。それは、見慣れた
はずの光景であったが、死を目

前にした氏には、その風景が光
り輝いて見える。そして、その
光景に、涙するほどの感動を覚

える。そのときの心境を、氏は、こう
語る。

「あの風景が輝いて見えたのは、
私に絵を描く望みも、生きる望
みも無くなったからである。私

の心が、この上もなく純粹にな
っていたからである。死を身近
に、はつきりと意識する時に、

生の姿が強く心に映った」
そして、その深い感動のなか

で、氏は、こう思い定める。

「もし、万一、再び絵筆をとれ
る時が来たなら、私はこの感動
を、いまの気持ちで描こう」

もはや、その時はもう来ないだ
ろうとの諦念の中で、氏は、そ
の切なる願いを心に抱く。

しかし、氏は、奇跡的に生還し、
再び絵の道を歩み始める。

人の才能が開花するとき、そこ
には、こうした逆説がある。

才能の開花を願うかぎり、
才能が開花することはない。

なぜなら、才能を開花させたい
との思いが、我々の純粹な心を
曇らせてしまうからである。そ

して、その心の曇りは、我々の
中の最も大切なものを抑え込ん
でしまう。

生命力。

その根源的な力を抑え込んで
しまう。

では、生命力は、いかなるとき、
開花するのか。

いま、この日々を生きている
ことへの、純粹な感動と感謝。

それを抱くとき、我々の奥深く
から、生命力が開花し始める。

そして、そのとき、才能と呼ば
れるものも、自ずと花開く。

されば、その純粹な感動の力。
それこそが、我々に与えられる

真の才能なのであろう。



田坂広志
多摩大学教授 ソフィアバンク代表

BOOK